

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組 教育復興支援 宮城第6チーム

第6チーム 8月17日(水)～21日(日)

秋田・埼玉・石川・愛知4県から15人が参加(男性11人、女性4人)

活動場所 石巻市中里小学校、南三陸町伊里前小学校

活動内容 教育復興活動(学校施設・設備の復旧や学習活動支援など)

1 ボランティアへの思い

3月11日の惨状をテレビ放送で見たときからずっともち続けていた思い…それは、「被災地に赴き、大変な思いをしている人々の力になりたい」ということだった。JTUボランティアの話があり、すぐに立候補をした。津波によって甚大な被害を受けた石巻市と南三陸町の公立学校の復興活動に携われるということで、少しでも被災地の人々の役に立ちたいという気持ちでいっぱいだった。

2 「何のために」という思いにさいなまれた作業1日目

私たちが行った最初の災害復興作業は、中里小の花壇の雑草抜きだった。いつから手入れをしていないのか分からないが、雑草は背丈も根も伸び放題、植えてあった植物はほとんどが枯れ、土は固く、根こそぎ雑草を抜くのは至難の業だった。中里小学校から鍬を借りて、まるで土を耕すように雑草を根ごと掘り起こした。抜けない雑草へのいら立ちと、単調な重労働が続いたことで、「この作業のどこが災害復興につながるのか?」という感情を抱いた。「何のために」という思いにさいなまれながら作業を続けていった。



3 このボランティアのテーマは「つなぐ」

1日目の作業後、石巻港近くを通った。1階部分がえぐりとられた家、骨組みだけになってしまったビル…数か月前にテレビで見た光景が、まだそのまま残っていた。そんな光景を目の当たりにすると、ますます雑草抜きの意味が分からなくなってしまった。しかし、夕食後のミーティングで、本部中央執行委員が、5月ごろの中里の様子や、第1チームから第5チームまでの作業の経緯を語ってくれた。第6チームの私たちが、これまでに「つないできた」ボランティアの総仕上げをする役割であることを聞き、自分が「一人で何かしてやろう」と勘違いしていたことに気付き、情けなくなった。3月からの被災地の人々の努力、第1チームから第5チームまでのJTUボランティアに参加した教職員のとりくみがあったから、私たちの最初の作業は雑草抜きだったのである。このことが分かり、ボランティア作業に対する迷いはなくなった。

4 被災地の子どもと触れ合った作業 2 日目

作業 2 日目。この日の自分の作業は、プール監視補助だった。地震の影響でプールサイドに敷き詰めてあったコンクリートブロックはがたがたになっており、プールとの間に大きな陥没あともあった。被災した子どもの中には、夏休みだというのに家族と十分過ごすことや出掛けることもなく、この夏は、学校のプールが唯一の楽しみで、毎日通っているとのことだった。



子どもとプールの中で楽しく遊んでいると、15時近くに突然大きな揺れがあった。少し経つと、揺れはおさまったが、その後、津波注意報が出された。後で、震度5弱の余震だったことが分かり、余震が続く状況の中で生活する人々には、心的な負担がかなりあることを身をもって知った。それと同時に、被災地の子どもが、地震が続く状況を受け入れながら、豊かに暮らすために楽しみを見いだして生活をしようとしていることにたくましさを感じた。

5 「被災地の先生たちが少しでも楽ができるように」と思いを込めた作業 3 日目

作業 3 日目は、南三陸町の伊里前小学校へ赴いた。南三陸町に入ると、生々しい津波の被害が残されていた。伊里前小学校での作業は、1階から3階までのすべての窓拭きだった。右手に濡らした古新聞、左手に乾いた古新聞をもって、内側と外側を順に拭いていった。窓は、外側が土でざらつき、かなり汚れていた。きっと1学期は、地震後のさまざまな対応に追われ、掃除に時間をかけることができないどころか、休む間もなかったであろう被災地の先生方のことを考え、「しばらく先生たちが窓ふきのことを気にしなくてもよいくらいきれいにしよう」と、ボランティア仲間で気合いを入れて作業にとりくんだ。拭き残しがないか、遠目から見て十分でないところは、2回も3回も拭いてきれいにしていった。



「しばらく先生たちが窓ふきのことを気にしなくてもよいくらいきれいにしよう」と、ボランティア仲間で気合いを入れて作業にとりくんだ。拭き残しがないか、遠目から見て十分でないところは、2回も3回も拭いてきれいにしていった。

6 おわりに

ボランティア作業をしながら、さまざまな思いが頭をめぐったが、最終的に自分の中に残った考えはただひとつだった。それは、

「今後、毎年、石巻市と南三陸町に来て、手伝えることは何でもさせてもらおう」ということだ。復興がすすむにつれ、もしかすると自分にできることはなくなってくるかもしれないけれど、被災地と自分を「つないで」くれた今回のJTUボランティアをきっかけにして、自分でボランティアすることを毎年「つないで」いきたいと思う。